

埋もれた婦人運動家(2) 飯島喜美



女工哀史で名高い東京モスリンの女工タマちゃんとは昭和初頭、弾圧の嵐吹き荒ぶさなかを密航してプロフインターン大会に参加した。非転向のまま24歳で獄死

目玉のくりっとした少女

その墓は、初冬の陽だまりにひっそりとたっていた。かろうじて五十センチメートルはあるうかという、つつましやかな墓である。

「飯島喜美之墓」「昭和十年十二月十八日 行年廿五才」ときざまれている。数年まえ飯島家の墓がつけられてあわせおさめられるまで、これが彼女の墓だった。はげしく燃焼した彼女の生涯と、これはまったく対蹠的なしまのなかに、その墓はあった。千葉県旭市の幸蔵寺、ふつう土地の人には大坊とよびならわされている寺の一隅である。

労働者出身の女闘士として、不屈のマルクス主義者として、若い命を栃木刑務支所における飯島喜美は、明治も終りに近い一九二一年明治四十四年十二月十七日、父倉吉と母ちか

の長女として、この町に生まれたのだった。

当時の地名でいうと匝瑳郡太田村二〇二番地だった。生家は、落花煎餅を売る店などがならぶこの町の、仁玉川にかかる「りゅうけいばし」のたもとに位置した。提灯職人だった。

両親にはつぎつぎと子供が生まれた。二人は子福者であって、結局、五男八女計一三人の子供にめぐまれた。

米騒動、第一次大戦の終結、戦後恐慌、関東大震災などが、彼女の小学校時代に相ついでおこっていた。慢性的な不況が全国を重苦しくおおうようになっていた。そういうなかで、子沢山の貧しい職人の子女にあたえられた運命は、ほぼきまったようなものである。

二歳の少女は子守にだされた。それより一九二六年(昭和二年)二月に、東京モスリン紡織株

鹿野の政治家直 (早大教授)

式会社(ふつう京モスといわれた)亀戸工場に、女工として就職するまで、転々と女中の生活を送った。

女中奉公のつらさを、喜美はのちに労働運動をするようになってから、同志の婦人としてみじみかたりあったという。けれども、彼女がその死にいたるまで烈々ともやしつづけた労働するものとしての自覚は、おそらく、このつらい労働のなかからめばえた。

東京モスリン亀戸工場は、『女工哀史』の著者細井和喜蔵が、織布工としてはたっていた工場として名高い。今日の町名でいえば、それは、墨田区立花一丁目にあつて、いまでは分割されて住宅や小学校(第二吾嬭小)がたっているが、それでも十間川や慈光院にそった東南角の、たてこんだこのあたりに珍しく荒涼とした建設省跡地は、かつての工

場の規模の一端をつたえている。かつてはここに四〇〇〇人の労働者がはたらいていた。

紡織産業、それは戦前の日本の基幹産業だった。日本の外貨収入の大半がそれによってもたらされた。それなくしては、日本資本主義の発達もまた軍備拡張もありえなかった。

それだけに、日本が「大國化」をいそげばいそぐほど、そのしわよせは紡織労働者の双肩にもろにかぶさってきた。そうして紡織労働者とはいえば、そのほとんどが女性であり、なかんずく未成年の女性であつた。

劣悪な労働条件による長時間労働や、それを保障するための数々の人権無視をともしなう寄宿舎制度などは、日本資本主義が構造的に要求したところであつて、「女工哀史」の生まれるゆえんはそこにあつた。

東京モスリン亀戸工場も、もとよりその例外ではなかった。社側の御用作詞家によれば、この工場は、「花の名どころ 亀戸に／＼香ふ梅より なほ清き／＼操を誇る 三千の／＼心は一ツ へだてなし」と、まるで理想郷であるが、細井和喜蔵の証言では、「そのあたり一帯は砂塵と煤煙で濛々として殆ど自然の跡形を見せぬ荒地」であり、「亀戸に花があつたのは東京でなくして江戸時代だ」。女工

小唄のほうが真をつたえる。「籠の鳥より監獄よりも／＼寄宿すまひはなほ辛い」「工場は地獄よ主任が鬼で／＼廻る運転火の車」。十五歳の少女飯島喜美が、女工となつたのは、こうした工場であつた。

そのころ女工となるには、工場から募集地へ派遣された募集人の手をつうじるのが、もっとも普通のケースである。かれは、会社の宣伝ビラで、まず娘たちの心をそそりたてて、亀戸工場の場合は、たとえばこんなふう

「東京モスリン紡織株式会社亀戸工場は、東京の名所亀戸天満宮から東へ三丁の処にあります。会社の資本金は壹千五百万円で、綿糸、キャラコ、モスリンを織る大工場であります」

「工場内には、新築の寄宿舎、学校、病院が設けられてあり、総べて無料であります」

そうして募集人は、前貸金をちらつかせながら、親から承諾書をとってしまい、子女を工場へとつれ去るのである。年季あけまでにはふつう三年三ヵ月を要した。小学校では喜美の二年上級で同じく亀戸工場に入った加瀬よしさんによれば、このあたりにきていたのは川口という周旋人で、裁縫も生花も教えてやるといい、二十円貸しますといつて募集していたという。

工場へ入っても三ヵ月は見習い期間であ

る。喜美は、亀戸工場工員学校の女工員養成所にいれられ、技術をまなんだのち、紡績科総掛にまわされた。総掛というのは、つむぎおわった糸をリールにかける掛りで、女工の持場となつていて、六時から六時までの星夜二交代制の十二時間労働が、彼女をまらうけていた。目のくりっとした十五歳の少女は、同年輩の年少労働者にまじつていそがしくたはたっていた。しかしからだのかたまりない時期はげしい長時間労働のため、のちにこの少女の左肩は右よりあがつてしまうようになる。

喜美が入社した一九二七年は、金融恐慌のおこった年である。その処理をめぐって若槻(礼次郎)内閣はたおれ、田中(義一)内閣がそれにかわつた。田中内閣は、三たびにわたる山東出兵を行ない、ファシストたちの大陸進撃を準備しはじめた。一九二五年国際労働機構が深夜業禁止を決議してから、経営者は、工場の「合理化」をどんどんすすめはじめた。そうしたなかで、米騒動ののち息をふきかえした労働運動は、急激な発展をみせるようになっていた。友愛会は、一九二一年、日本労働同盟と名称を改めており、さらに二五年

には、その総同盟からも、左派が日本労働組合評議会をつくって自立するほどであった。

東京モスリン亀戸工場の労働者にも、組織ができ、若い労働運動家がそだちつつあった。

この工場に労働者の組織がはじめてできたのは、一九二一年（大正十年）であって、労正会という組合であった。それまで肉体的にも精神的にも奴隷状態におかれていた女工に、ともかくも「会」でも何でもいいから団結をやらせ、これを漸進的訓練によって真の労働組合に仕立てて行く」という目的にたっていた（女工史）。その労正会はまだなくつぶされたが、二五年三月になると、工友会ができた。これは労資協調的とはいえあきらかに労働組合であって、日労系の日本労働組合同盟に団体加盟し、関東紡織労働組合亀戸支部をつくっていた。

そういうなかで青年組織ができて、大和庄祐や伊藤憲一らが、活発に研究会などを行なっていた。飯島喜美は、入社するとまもなく、まだ三ヶ月の養成工時代をおわらないうちから、この会合に出席するようになった。研究会の常連は、四〇〇〇人の工員中一〇〇人程度であったという。いま東京都の大田区蔵をしている伊藤憲一は、高等小学校に在学中、

父の死にあつて中退し、ゴム工場の労働者をへて、一九二五年からこの亀戸工場紡績第一工場の保全工であった。十五、六歳の少年が、ひとかどの労働運動の指導者であったのだからおどろくが、それほど工員や女工たちはみな若かったのもあった。伊藤は、研究会や職場で喜美と知りあった。

「女工史」の中から生れた革命家

「われわれは大正十三年の卒業でしてね。わたしの生まれたのは、実際には、明治四十四年十二月九日、喜美ちゃんより九日早い」。

おはなしをうかがいにおとずれたわたくしにたいして、伊藤さんはこういつて、恰幅のいいからだをゆすつて笑った。おそらくこれらの若い労働運動家たちは、はげしい労働をぬつての勉強会やその他の活動のあいまに、親愛の情をこめて、お互いの境遇をかたりあうことも少なくなかったであろう。もう半世紀近くもまえの事柄が、氏の脳裡にあざやかにきざみこまれているのを目のあたりして、わたくしは、かれらのあいだの同志的な連帯と、工場のなかでの青春の日々に想いをはせ、一瞬ふかい感動におそわれた。

不況のなかでの「合理化」攻勢と、全国的

たりした。十六歳のときだった。

きからであつたらしい。組合はうごかなかつたので、伊藤や大和らの青年前衛隊が独自に活動をはじめ、女性労働者の集会をひらいた。手渡し金減額反対のほかに、外出の緩和などの要求がでてきた。前借金のあるあいだ、寄宿女工は、週一度しか外出をゆるさなかったのである。翌日、さらに大きな集会がひらかれると、会社は、おどろいて計画を放棄した。

どちらかといえば無口のこの少女の思想的

な成長は、めざましかった。伊藤や大和の指導のもとに、一九二八年夏の、第二工場精紡五〇〇人による賃上げ要求のストライキには、栃木県小山出身の田浪ハルと二人で指導者として活躍した。このストライキは、組合の方針に反して、伊藤ら青年前衛隊が発議したもので、それをうけて喜美らの指導のもと、女工たちは機械をとめて寄宿舎にたてこもつたのだ。男子禁制のその寄宿舎へ、会社は、暴力団のような組合幹部と人事部員をつかっておどしをかけたが、喜美はまったく動揺しなかった。彼女は、寄宿舎の廊下の障子をあげ、それによりかかつて足をだし、平気な顔で応対しつつ、ストライキを勝利にみちびいた。寮のなかをみんなでデモッ

な社会運動の昂揚は、亀戸工場でも火花をちらした。そこでは、一九二六年、二七年、二八年と三年つづけて夏に争議がおこつていく。二六年の争議は、夕食のくさつたおかずで集団中毒がでたのがきっかけとなつて、二五〇〇人が五日間のストライキをうった。若い労働運動家たちが研究会をひらくことができたのも、このストライキののち、外出がいくらか自由になつたせいであつた。

二七年のストライキは、喜美が入社した年の夏のことであるが、会社が女性労働者の賃金のうち強制貯蓄分を増額すると発表したことからおこつた。女性労働者の低賃金についてはよくかたられるが、彼女らは、それをまるまる受けとっていたわけではなかった。共済会費、送金、それから前借のあるものは前借金償還のほかに、信託金を日収の一日分、積立金を大人の三割、部屋貯金を手取の二割以上ひかれていた。あとの三者をあわせてだけで、収入のおよそ四割となる。女工に強制貯金をさせることによって、会社は、資金ぐりをらくにした。二重の収奪であつた。その強制天引き分を、四割からじつに六割にあげると、会社は発表したのであつた。

喜美が実際の活動に参加したのは、このと

ストライキは勝利をおさめたが、組合の統

制をやぶつたというので、青年前衛隊員のうち、大和庄祐、小倉雄作、伊藤憲一、佐藤新之丞の四人は、組合を除名され、会社を解雇になった。ともにたたかた人々は、この犠牲者のため五〇〇円の餞別をあつめた。おそらく喜美はその先頭にたつていたのであろう。さらにかれらは、追われゆく四人のために送別会をもよおした。

そのときの記念写真がのこっている。四人

を中心として、亀戸支部の旗をたてて六〇人ほどの男女青年労働者が、思い思いの表情で写っている。女性のほとんど全員が髪をゆつていゝなかで、喜美はひつとめで、あの特徴ある目をややうつむきかげんにして、たかいたのきびしさをかみしめているかのようである。伊藤らは連名で、「石をもつて追はるる

如く、親しみ深き方々から離れゆく」と考へると真実に淋しい感が湧きます。だが皆んな同じ目的の下にひたすら進んでゆけば又親しく手を握る機会もあると思つて慰めます」云々との挨拶を、私製葉書に印刷しておくり、工場を去つた。親しい同志だった喜美には手わたしたらしく、遺されている葉書には切手

も消印もない。伊藤はそれから日本共産党に入つた。

そののちの喜美は、亀戸工場の運動の事実上の責任者となつた。戦後、喜美について調査した山岸一章にあてて、大和庄祐は、当時の彼女の活躍ぶりをつぎのように書き送つて

「昭和三年夏のストライキで私や伊藤憲一君が首になつた後、青年活動家や婦人労働者の間に動揺があつたのを引き締めて、もり返した中心が喜美ちゃんでした。東京合同が亀戸工場へビラをまいたことから、私の下宿がガサにあり、共青の機関紙『青年戦士』が没収され、運よく不在だった私はそのまま潜ることになりました。その時、工場内の寄宿舎も搜索されたのですが、喜美ちゃんは『青年戦士』や『無産者新聞』を素早く処理したらしい、犠牲を受けなかつたので、その後連絡がついていました。昭和四年（一九二九年）二月市ヶ谷刑務所に入った私に、亀戸工場の仲間から差入れがあつたのも、喜美ちゃんが組織していたようでした」

しかもそれらの活動を喜美は、一週間交代の星夜十二時間労働とたえまない勉強のかたわらつづけていったのだ。職場へ派遣されてくるオルグとの連絡も、彼女の任務であつたろう。こうしたオルグの名前は絶対にきけなかつたもので、繊維工場へ派遣されてくるといふので、おセンチちゃんといふでいた。その

ころの彼女を知るもの同志たちは、異口同音に、「負けずぎらいの気性」とか「非常にきはきして、頭の回転もよく」とか語っているが、使命感にもえるこの少女は、はげしい労働とたたかいにあげられる日々のなかで、おのずと意志的にならざるをえなかったであろう。

「闘争・死」と刻まれたコンバクト

労働運動でめだつ存在になるにつれて、十七歳の飯島喜美は、まったく異なる二つの機構から注目されはじめた。一つは警察であって、一九二九年四月、工場でストライキを準備中だった男性指導者が検挙されたのにつづいて、彼女も検束されて亀戸署に留置されている。最初の検束であって、このときは三、四日でだされたいらしい。

喜美に注目したいま一つの機関は日本共産党であった。一九二八年の三・一五事件、二九年の四・一六事件と大量検挙がつづくなかで、党はしだいに、彼女を党員の候補者と考えるようになっていった。その結果、二九年五月、四・一六事件の直後、喜美は共産党に入党し、東京モスリン亀戸工場細胞に属した。そのころこの細胞には一四、五人の党員

があり、二交代勤務の関係上、二班にわかれていたという。まもなく彼女は細胞長となった。こうして彼女は、大弾圧後の組織活動の一翼になったわけである。八月ころには、全協江東地区オルグの指導のもと、全協京モス亀戸工場分会を組織し、その責任者となつて組織の拡大につとめたという。

それからまもなく、飯島喜美のすがたは工場の仲間のまえからきえた。これまでの彼女の活動ぶりから、おそらく地下活動に入ったのだらうと考えて、仲間たちは彼女のことを口にはださないようにしていたが、そのとき喜美は、じつは遠くモスクワへ旅だっていたのだ。一九三〇年(昭和五年)五月にひらかれたプロフィンテルン第五回大会の日本代表団の一人としてであった。プロフィンテルンは、「赤色労働組合インターナショナル」ともいわれ、国際的左翼労働組合運動を指導する機関であった。彼女の資格は、日本繊維産業の代表ということで、もちろん密航であった。日本からはじめての女性労働者の出席であり、知識人出身の代表なら少なくはなかったものの、労働者出身ということで非常に注目された。

モスクワでの喜美は、八月十五日から九月

までひらかれた大会に出席し、紺野与次郎(団長)、山本懸蔵、大井昌、児玉静子らの日本代表とともに、各種の会合に参加した。彼女は、日本の女性労働者について報告をつくって演説したという。そうして大会の終了後は、プロフィンテルン講習会に入り、各国の代表たちと合宿して、コミンテルンの指導者から教育をうけた。さらにそののちもソビエトにとどまって、彼女は、東方労働者共産主義大学(クートベ)に入学して勉強した。彼女はのちに、「日本で勉強できなかったわたしは、ソビエトでやっと勉強できたのよ」と語ったという。翌年十月末に帰国したころは、きれいなロシア語をかけるようになっていた。

すでに日本の中国東北への進撃がはじまっていた。このいわゆる満州事変こそ、「独裁者の世界進撃は、一九三一年に奉天で始められた」と、シグメント・ノイマンが『現代史』に記している事件である。たかまるファシズムの嵐のなかで、二十歳になるうとする喜美は、職業的な革命家としての道をあゆみはじめた。彼女は主として共産党の中央婦人部員として、女性の組織の拡大のために献身的にはたらいた。困難な地下活動のさまは、山代巴「濁流を越えて」にくわしく描かれて

いる。婦人部長であった児玉静子や党員であった宮川寅雄らと、婦人部の活動方針をきわめていったほか、「赤旗」婦人版やパンフレットに、女性の活動の任務に関する論説を発表している。こうして彼女は、各労働組合や各地域に、つぎつぎと婦人部を組織していった。

一九三一年の終りころ、活動のなかで喜美と知りあった森田シゲノさんは、当時の彼女の印象をつぎのようにかたててくれた。

「玉ちゃん玉ちゃんといってね、目が大きくて、頭の回転が早いとともに表情のいきいきした人でしたよ。いい意味でのエネルギーで。玉ちゃんというの、いい感じのあだ名ですよ。人から尊敬されるような固い人でなく、親しみぶかい人でした。謙遜で、素朴で……。それでいて飯島さんは、理論的にもしっかりしていました。論旨が明快で、他人の引きうつしでなくって。こんなふうに自分の理論をもつというのは、若い女性としては珍しいことではないでしょうか。婦人部というより、もっと重要な仕事をしていたのでないでしょうかね。」

けれども弾圧は日ごとに強化され、スパイがもぐりこんで共産党の組織を破壊していった。そのなかで喜美は、党内で批判されるよ

うな立場に追いこまれたらしい。この真相はわたくしにはよくわからない。が、一説によると、党の中央を信用できなくなった彼女が、二、三の同志とべつに『赤旗』を発行するなど分派活動を行なったのを、党の中央から批判され、中央婦人部員からおろされるといふ処分をうけたという。この分派活動のことは、『赤旗』一一四号(一九三二年一月二十日)にでていて、日本共産党中央委員会の名を僭称して、一九三二年十二月二十四日付をもって、『赤旗』号外というプリント刷り檄文を発表したとある。また他の説によると、そのうえ彼女は一九三二年の春以来の、スパイ問題やハウスキーパー問題やで強まった一般党員からの批判のまえにたたかれたのだという。いずれにしても喜美が、これらの批判を率直にうけ入れたことは、事実である。

「活動上のあやまりがあつて、それを具体的になたたかひのなかで克服するのだといつていたのを、きいたことがあります。それは、当時の飯島さんにとって、どんなに大へんなことであつたかと思えますね」と、前記の森田シゲノさんは、東京は代々木病院の一室で、白衣につつんだ身をまっすぐのびしながら、ともにたたかってきたものだけがもちろ

る実感をこめて語った。喜美はこの試煉によくたえた。三月か四月のころ処分を解除されている(『赤旗』二七号、二七二号)。

一九三三年の春、喜美は、もう一度やりなおすのだといつてふたたび工場に入つていった。一労働者として。入つたのは、川崎市の富士紡かなにかであつて、そこで彼女は、はたらきながら組織づくりをするというみちがあるきはじめていたのである。「予審終結決定書」には、日本共産青年同盟神奈川地方組織の再建のため巡回オルグとしてはたいたと書かれているが、この陳述は、川崎の工場内にあたらしくめばえはじめた組織をかくすための偽装であつたかも知れない。山代巴さんは、「一度指導者の地位についた人が、自分の非を率直にみとめて、も一度工場からやりなおすといつて工場へ入つていった。そんな革命性をもった人を、わたしはまだみたことがないね。男の人ならたいいてい、自分がえらくなると、いろいろなことをいって、そこからおりようとしなが、彼女はさばさばして工場へ入つていったよ。愚痴はなかったね」と、喜美をたたえることを惜しまなかった。そんな喜美に国家の手がのびてきた。多くの共産党員とおなじく、彼女もとらえられ

る。一九三三年五月二十一日のことだった。治安維持法違反の被疑者として、喜美は市ヶ谷の東京拘留所に収監され、それより彼女は「昭和八年予第一〇八五号被告人」として、ながい未決生活を送ることになる。それは彼女が非転向でとおしたからであった。

喜美がとらえられてから三週間とたたない六月七日、日本共産党の最高幹部であった佐野学と鍋島貞親が、獄中で転向を声明した。この事件は、共産党員やその周辺にいた人々に大きな衝撃をあたえ、転向のなだらけ現象をひきおこした。七月末までに既決囚党員の三五・八パーセント、未決拘留中の三〇パーセントが転向したというから、転向がいかに地すべりの的であったかがわかる。そのなかで喜美は、転向をがえんじなかつた少数者の一人であった。「尚ホ継続ノ必要アルヲ以テ」という理由だけで、一ヵ月ごとにくりかえされた勾留更新決定が遺つていて、彼女のがんばりぶりをいまにつたえている。

勾留中の拷問はありふれたことであつて、喜美もさんざんそれをうけたにちがいない。人なみの拷問でも、なにしろ女一人に男二人くらいがかかって、打ちたたくのである。ましてや彼女は、モスクワへ密航した経歴のあつた橋本刑務所へ送られた。刑期は七年ともいふ八年ともいわれる。

それはたまたま森田シゲノの独房と一つおいた独房であつた。一日に一度の運動のとき、森田は、やせおとろえて目ばかり光っている喜美と顔をあわせたが、もはや喜美には、それがだれだかわからなかつたらしい。同じくこの刑務所で会つた橋本菊代（山本正美氏夫人）は、あまりにも変りはつた喜美のすがたに、しばらくは口もきけなかつたという。独房に放置されて喜美の病状はどんどん悪化した。彼女は、その冬をこすことができなかった。十二月一日、危篤状態におちいり、それでもそれから十七日間がんばつて、十二月十八日午前五時、ひっそりと息をえた。二十四歳の誕生日を迎えた翌日だった。橋本は、棺のふたをする音で喜美の死を知り、せめて告別でもと申しでたが、とりあつてもえなかつた。遺族のもとには、十二月一日と十八日の日めくりが保存されており、それぞれ「喜美キトクノ来電」「喜美死亡ノ来電」と書きこまれていて、両親のつきせぬ無念の情をものがたっている。

一人の戦士がたおれたのだった。それにしても刑務所がわの措置は、冷酷であつた。

持主である。残酷なりンチが加えられたであらうことは、想像にかたくない。しかしこの勝気な娘は、よくそれとたたかつた。

一九三五年三月十九日付で、「東京市牛込区市ヶ谷富久町一―二番地」から父倉吉あてにだした喜美の葉書は、親を思う情と当時の彼女の生活の一端を語つてなまなましい。

「長らく御無沙汰致しました。お急がしい事であらうお父様に、又此の様な手紙を書かねばならぬ事を非常に心苦しく思ふ次第であります。お父様より他にたよる所のない私は仕方なく筆を取りました。今年も又お彼岸が廻つて来て寒い冬も過ぎ去りました。着物はやぶれても寒さが過ぎました故どうにか耐えます。都合が出来なければ今年の十月になってから送れたら送つて下さい。ですがお金の方は後一日分のチリ紙代と石ケン代を余すだけになりました。都合出来たら送つて下さい。お願い致します。其の後お母さんの体はどうですか。又皆様にはお変わりありませんか。郵便代も残り少ない為ハガキで失礼します。」

倉吉は、おそらく世間の目に遠慮しながらも、わが娘の行動には理解をもっている親だつた。喜美も、倉吉が自分を理解してくれているのを、日ごろよこんでいたという。

救援会の人々は、熱心な救援活動をたやさないかつた。一九三五年七月十六日付の片山松子の喜美あての葉書は、岩波文庫の「ダーウ

イン伝」と『近代民主政治』第二巻をさしいれたことをつたえている。弾圧のなかでも運動の焰がたやされなかつたことと喜美のくじけない志を知るに足りよう。

そうしたなかで、その年六月二十六日、東京刑事地方裁判所の予審判事安斎保は、喜美を治安維持法違反として、東京刑事地方裁判所の公判に付すことを宣告した。逮捕されてから二年一ヵ月すぎたころであつた。しかしこのとき喜美のからだは、ながい拘留生活とおそらくは拷問その他の虐待のため、すっかりいためつけられ、結核菌がむしばむようになっていた。

肺結核は、不治の癩に近いやつた。公判にまわされて喜美は、息の苦しいのをおして法廷にかよつた。八月十九日の午前九時に、その公判はひらかれていく。担当は、東京刑事地方裁判所第八部裁判長判事石坂修一であつた。石坂は、敗戦後、仙台高裁長官として松川事件を手がけ、のち最高裁判所の判事をつとめ砂川事件、東京都公安条例違憲裁判などでタカ派として定評のあつた人物である。

裁判所は、この病みおとろえた被告に対して、裁判をいそいだ形跡がみえる。おそらく秋たつころ判決が下つて、喜美は、橋本町に

あつた。十二月一日、喜美が危篤におちいるとすぐに、死亡のさいは研究材料として千葉医科大学に送つてもよいかとの照会の手紙をだしている。貧しい父親は、世間へのはばかりもあつて、遺体をひきとりにゆけなかつたので、彼女の遺体は千葉医大へ送られた。彼女の遺骨が自宅へかへつたのは、一年ほどかかつてさんざん「研究」されたものの、一九三六年十一月のことであつた。遺留金一円一銭とわずかばかりの遺品は、運送料をさしひいて親もとへ送られた。そのなかには「闘争・死」ときざみこまれたコンバクトもあつた。娘の臨終の模様を知らせてほしいとの倉吉の問いあわせに対し、刑務所当局は、「御役人様方ニ色々世話シタリ御親切ヲ感謝スル旨数度繰返し、死ノ末期ニ至リ最早ヤ日本ノ女性ニ立帰リ赤化思想ヲ全く抛棄セル旨誓」つて死んだとこたえている。

多くの女性の人生が、「忍従」の二字にほとんど運命づけられていたころ、飯島喜美は、子供のときからの労働の生活をおとし、社会の矛盾をはつきりとつかみ、それと果敢にたたかつた。それだけに権力は、彼女をおそつて、その若い命をひねりつぶしてしまつた。



チェスで心の交流を
チェス 通信教育

チェスは欧米上流社会で最も親しまれているゲーム★今年9月ユーゴのスコピエでチェスオリンピック開催★世界チェス連盟制定の正式ルールで日本チェス協会最高スタッフ指導★一家団らん 頭の体操にも最適★入会案内「チェスの遊び方」無料贈呈ハガキで下記へ

〒164 東京都中野区本町6-16-12・V31
教育ビューローチェスカレッジ ☎384-1258

